

## 学校体育における勝敗観

学校教育教員養成課程 98 - 127 横山 剛士

### 1. 研究の動機

運動会における「徒競争」の是非をめぐる議論が職員会議で行われるということを聞いたことがある。この議論ははじめから遅い子は運動会でも勝てないし、そのような結果のわかっていることを運動会でやるのはどうかという意見と、スポーツだから競争によって勝ち負けが出るのは当然であるという意見の対立である。これは、1996 年ごろ日本経済新聞やNHKなどのマスコミに取り上げられ話題になった。徒競争の廃止派の主張は、集団のリレーに変更したり、途中にじゃんけんをいれたり、障害物を置くなどの「興味走」に変更を行い、個人の競争場面を作らないよう配慮するというのもである。このように学校体育においては教師が個人の競争による勝敗を決めることを避けている部分がある。また、「何らかの工夫を施して種目の競走色を弱めたりする学校はここ 10 年ぐらい、年々増加」と新聞にあるので、かなりの学校でこのような取り組みがはじまっているのではないと思われる。これらは勝敗に関する一例であり、競争に勝てない子への教育的配慮だろう。

しかし、スポーツとはもともと競争という要素を含む身体活動である。このようなスポーツを取り扱う学校体育においてはその他の競技においてもいろいろな競争場面が生じる。では、なぜ勝敗を決めない体育・スポーツが誕生したのか、また、学校体育において勝敗はどのような意味を持つのだろうか。この問いに対してどのような議論が展開されてきたのだろうか。これが本研究の動機である。

### 2. 研究の目的

本研究では、勝敗に関しての捉え方や考え方が変化してきているのではないかという問題意識に立ち、その捉え方や考え方の現状を明らかにすることを目的とする。しかし、なぜ近年の学校体育において勝敗の扱い方に変化が起こったのかという問いに答える報告はない。そこで、現在、学校体育で勝敗がどのように捉えられており、その考えをもとにどのような体育実践が行われているのかを明らかにする。

そして、体育・スポーツの勝敗について述べている実践者や論者がどのような勝敗観に基づいてどのような実践や提示を行っているのかという特徴や傾向を明らかにしたい。また、その特徴や傾向はどのような考え方に影響されているの

かも同時に見てみたい。

本研究では、以上をふまえ以下の事柄を明らかにすることを目的とする。

- ①近年の学校体育では勝敗とはどのように捉えられてきたのか。
- ②その捉え方の特徴や傾向はどのようなものであるか。

### 3. 研究の方法

本研究では、体育関係の商業雑誌を主に用いる。体育雑誌を資料として選んだ理由は、その時代に応じた学校・体育・社会体育・競技スポーツに関して問題提起を行っており、議論しているということ。つまり、どの程度取り上げられたかによって、その時々に関心度や議論の「量」が把握できると考えたからである。また、掲載された論文は体育に関する研究者や現場の教員によるものがほとんどであり、現在の体育・スポーツを的確に捉えている論であると考えることができ、信頼性も高いと判断できる。雑誌は『学校体育』（日本体育社）と『体育科教育』（大修館書店）の2誌とした。

本研究では、この2誌の商業雑誌をもとに勝敗観について言及している部分を抜き出して整理分析し、その特徴をみた。そして、特徴別に区分し、その区分別の特徴的な考え方や授業実践の傾向などをまとめ、考察した。

本研究では1990年からの商業雑誌をみることにする。1990年代に着目した理由は、近年の学校体育における勝敗観の捉え方の変化やゆらぎは「新しい学力観」が大きく影響していると考ええるからである。ここで、特筆すべきことは、新しい学力観の柱である「関心・意欲・態度」の重視である。それまでも、「運動に親しませる」「楽しく明るい生活を営む態度」「運動を楽しくできる」などの「関心・意欲・態度」にあたる表現を用いていたものの、内容は体力づくりの重視、社会性の発達目標を並行して重視しており、根本的には「運動による教育」の立場を堅持したといえる。つまり、このような状況下では、競争においては勝敗が現実的な内容となり、そのため、勝敗によって評価が可能であったかもしれない。しかし、「関心・意欲・態度」を重視する新しい学力観では、勝敗だけに頼った評価ができなくなったのではないかと考えられる。そして、勝敗に頼らない評価や考え方が登場し、その後の実践や捉え方に問題が出てきたのではないかと。つまり、新しい学力観を重視するようになった1990年代に体育・スポーツにおける勝敗に関する疑問や矛盾が出てきたのではないかと考えることができるからである。

#### 4. 結果と考察

本研究では、商業雑誌で扱われていた論者の勝敗観にあたる部分を特徴や考え方の傾向などをもとに分類した。その結果、大きく3つに分類し、この区分に基づいて学校体育において勝敗はどのように捉えられてきたのかまとめる。

はじめの区分では「勝利に肯定的な価値を付与する論と実践事例」をまとめ、考察した。ここでは、勝利に肯定的な価値を与えていることから、「みんなに勝つ機会を与えてあげたい」という提案や実践報告が多かった。しかも、これは学習指導要領に「競争では勝敗が伴うことから、できるだけ多くの児童に勝つ機会が与えられるように工夫する」と書かれているため、その影響を受けていると考えられる。また、敗北についての意味や価値が書かれていなかったこと、着目していないことなどの特徴があった。実践事例においても「できるだけ多くの児童に勝つ機会」という視点からの取り組みが多かった。

第2の区分では「敗北に対して意味や価値を見出す論と実践事例」をまとめ考察した。敗北に対する意味や価値は論じているテーマによっても様々であった。全体的に通してみると「過程」に着目して論を展開しているものが多かった。これは新しい学力観でもある「関心・意欲・態度」の重視が、結果重視から過程重視への移行を示したと考えられる。また、競争社会の対語として共生・共創社会ということばがたびたび使われていた。これは、結果主義から過程主義への移行を競争社会から共生・共創への移行と捉えたものであると考えられる。しかし、競争社会が本当に終わって共生・共創社会に向かっているのか再度検討する必要がある。実践を見ると、やはり「過程」を重視している意見が多かった。

また、負けることや敗者への意味や価値について研究者がもっと研究し、体育・スポーツ関係者に正しく伝えるべきという指摘があった。本研究で取り上げた論文をみても、負けることや敗者への意味や価値はまだ認識が浅いということができだろう。

第3の区分では「勝敗と勝敗の付加価値に着目した論と実践事例」をまとめ、考察した。この論において見られる共通の問題意識は、勝敗と勝敗の付加価値は区別されて考えられるべきものということである。つまり、勝敗の結果がそのまま物理的・経済的な利益に、さらには人格的評価にさえ結びつきがちな今日のスポーツ状況において、ここの区別は重要であるということである。また、このような考え方は、近代スポーツの成立・発展の思想的背景であった数量的合理主義、業績主義が現代スポーツを支える私たちのなかにも生きていることが、私たちがスポーツ競争（試合）の結果を勝敗と観念する際、勝利の方に価値があると考え、傾向を生みだすと歴史的経緯が影響していると示唆された。

この勝敗と勝敗の付加価値の区別という問題意識に立ち、実践の提案は勝敗を教科内容として位置付ける傾向が見られた。また、この勝敗を教科内容として位置付けている論は1997年以降のものが多いため、最近このような考え方・問題意識が広まりつつあるのではないかと考えられる。

最後に、本研究で取り上げた「勝敗観」について、筆者の立場と今後、この問題をどのように考え、どのように議論されるべきか述べたい。

筆者は、勝敗を教科内容として扱う傾向が見られたように、勝敗と勝敗につく付加価値について区別して考える考え方を支持する。これは「物理的・経済的・社会的利益とスポーツの勝敗とは関係を一切きるべきだ」というものではないし、現代社会ではそれは不可能であろう。ただ、学校体育においてはこの区別の考え方は重要であると考え。なぜなら、学校では教師が子どもを評価するという関係にあるからである。そのため、学校体育における勝敗の意味と成績に限らず人間的な評価や社会的な評価とは区別されるべきであり、慎重に考えなければいけない問題である。

次に、では、学校体育では何を評価するのかといった問題が第2の提示である。つまり、学校体育における評価法の検討の必要性である。学校体育において「勝つことだけに価値がある」のではないとすれば何が評価されるのか。もちろん、新しい学力観のもとでは「興味・関心・態度」といった人間の内面にある部分を軸に評価がされるのであろう。また、子ども達は学校で様々な尺度によって評価されている。しかし、勝敗やテストだけならまだしも日常生活やさらには「心の教育」によって心までも評価されそうになっている。もともと「心」や「興味・関心・態度」の評価の基準は明確ではないため評価法は不透明である。つまり、個人の内面にある個性を評価されても何が評価される個性であるのか明確ではない。そのため、基準を設ければ優劣が出てくるし、基準を示さなければ「評価される個性」と「評価されない個性」が生まれ、不平等になりかねないといった矛盾が出てくる。また、評定といった評価が数字で表れることから学校体育で「何を何のために」評価したのかをもう一度検討するとともに、「誰がどのように」評価したのかも明らかにされるような透明性が必要であると考え。

また、このような「勝敗観」といったような問題は学校教育においてはその人の「個性」として尊重されるべき要素であり、人によって左右されるべきではない問題であろう。一方、筆者の立場からいうと社会的環境やスポーツにおける勝敗について個人が理解していないと、勝敗に必要以上の物理的・社会的利益と結びつけて考える「まちがった勝敗観」が生まれるという側面をもつ。そもそも「あるべき勝敗観」というのがいいのか、存在するならそれは何を指しているのか明確ではないため、今後、勝敗観は「このようにあるべきだ」という議論ではなく、「このような勝敗観に陥らないためにはどうすべきか」といった議論や提言が適切であると考え。

つまり、今後は、体育スポーツの指導者は体育・スポーツに関する認識を深め、目先の勝敗だけに流されることなく自分なりの勝敗観を形成する能力がいつそう必要とされるであろう。